慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカアドオ派社会主義概論（下）
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.4 (1924. 4) ,p.582(118)- 599(135)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240401-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

程強いものである……』と

イー・ティー・クックの言葉を借りて云へば「ヴェニスは一つの傍仕事であつた。ラスキンが自から彼の生れ故郷とも云ふ可き荒地に居るの感を覺えしは草原丘陵の間に於いてであつた。」かくしてラスキンは再び自然界の研究に沒入せんとするのであるが、其に先立つて「ヴェニスの石」の結末が語られなければならない。

附記　ラスキンがヴェニスに喜びながら然かも時には忌憚なきその醜陋を感ずる事ありしは前に一言した。一八五九年にNotron宛書面にヴェニスを指して「泥中に輝ける都あり」と云つたのは此當時の回想である。此書面は可なりラスキンの氣持を現はすものとして興味がある。次に一部を抽出する。

『一八五九年五月――其地で私は非常に多くの困難で乾燥無味な、機械的勞作を嘗めたので其地を去る以前に全く其魅力を失つてしまつた程です。分析なんて忌まはしい仕事です。問題を充分に論じ盡くす人間は不愉快な人間だと云ふ事は實にたしかです。……』

此態度は近世畫家論第三卷のそれに對比してラスキンの氣質を語る有力な材料である。勿論此書中にはイー・テイ・クックの云ふ如くユーモラスな誇張があるかは知れないが。

同じ感想を其當時に求める事が出來る一八五二年六月二十三日ローヂヤアスに與へた書はそれである。其中に「一番悪い事にはヴェニスに就いてあらゆる情緒（ソイーリング）を失つてしまつた事です」と。彼はヴェニスの生活に不愉快を感ずるとローヂヤアスの詩を吟誦して美しい感興を呼び戻さうとした、併し遂に一日『Bridge of Sighs の脚下に殘された正しく一呎半ばかりの泥水を見出してから、又家路につかうとしてゐる時にブランド・キヤナルで淺瀬に乘上げてから、私はキヤナルに就いては匙を投げてしまひました、以來其等については美しい情緒を回復し得ないのです……』。

（未完）

リカアドオ派社會主義概論（下）

津田誠一

十三

前掲リカアドオ派社會主義の諸星に關しては文獻以外行藏多く湮滅に歸せるも、獨りホジスキンに於ては佛人 Elie Halévy の錄せる傳記の存するありて稍詳細に其經歷を窺ふ事が出來る。彼は一七八七年末倫敦附近の Chatham に出生、幼少にして海軍に入り累進大尉たるに及び偶々罵言上官の忌諱に觸るゝ事ありて豫備役に編入時に年二十五。乃ち憤怨禁ずる能はず翌一八一三年 "An Essay on Naval Discipline" を表はし軍律の過酷上官の擅恣刑罰の殘忍を痛擊した。彼れが團結禁止法撤廢の鬪士として、著聞せる Francis Place を始め政治的急進派諸名士の知遇を得たる機緣亦た此一篇に發すと推せらる。閑を利して外遊三年、佛獨伊瑞諸國遍歷、歸來伉儷を得て居を Edinburgh に定め浩瀚二卷に亘る外遊感想錄 "Travels in the North of Germany" 1820 を上梓、爾來專ら文筆を以て處生の道を講せんとせしが事志に違ひて久しく貧窶に沈淪したるを漸く一八二三年 Place 並に James Mill の斡旋に依り急進派の機關紙 Morning Chronicle の議會記者となり倫敦に轉住するに及んで小康を得た。恰も擡頭し來れる勞働運動に對する彼れの盡粹は此時より始まる。即ち蘇人 Robertson と協力週刊雜誌 Mechanics' Magazine を發刊すると共に Place の保護の下に工手學校 Mechanics' Institute を創設以て勞働者階級の智的開發に努めた。G. D. H. Cole は曰く、ホジスキンは勞働者の獨立教育を提唱せる先驅である。勞働者は自己の爲め自己の手に依つて教育を行はざる限り、眞に彼等に必要なる教育は決して確保するを得ない。「之を庶人の爲に計るに其主人より教育を授かるよりは寧ろ教育を奪はるゝに如かず。蓋し斯の如き教育は軛に懸けんが爲めに家畜を訓練するに等しければなり」とは、彼れの思想の根本であつたと。然も Mechanics' Institute の經營維持は急進派中產階級の資力援助

を必要とするに至り諸事ホジスキンの裁量に任せず、僅に彼れは經濟學、文法、並に社會發達論の講師を以て甘んぜねばならなかつた。此間一八二五年其代表的傑作の稱ある "Labour Defended against the Claims of Capital" は Mechanics' Magazine に依りて公刊せられ、又一八二七年には前掲講義案に補正を加へて "Popular Political Economy" を上梓した。是より一八三二年其最終の著作たる "The Natural and Artificial Rights of Property Contrasted" を以て經濟制度を無視せる政治的改革の徒勞を指摘するに至るまでの短期間が彼れの極力勞働運動に活躍せる時代にして、勞働者の政治的要求が漸次熾烈となるに隨ひ威望亦た昔日の如くならず、憲章黨運動の初期に至るまでは間々無産者階級の會合に參加し演說したが其名聲と個人的勢力は次第に消滅して行つた。愛に於てか生計の必要は Morning Chronicle, Daily News, Courier, Sun, Brighton Guardian, Illustrated London News, 等諸種の新聞雜誌に寄稿の筆を執らしめ遂に一八四六年には Economist の社員となつた。社中偶々 Herbert Spencer あり。其自敍傳に依れば自著の表題に Demostatics と Social Statics との二種を提示し、其撰名をホジスキンに委ねたりと云ふに徵しても兩者の親交察知に難からず。晩年退社倫敦近郊に隱遁一八六九年八十二歲にして冥目。時に世人の腦裡既に此人無く一の新聞雜誌の其死を報ずるもの無かりしと云ふ (Lowenthal: The Ricardian Socialists, pp. 61-65, G. D. H. Cole: Introduction to "Labour Defended," pp. 8-15, 小泉教授「社會問題研究」四三四－四三六頁)。

英國社會思想史上に於てホジスキンの占むる特異の地位は、Bentham 流の功利の原理に代ふるに往昔の Locke 自然哲學を以てせる點に在る。即ち彼れは人類制度の檢討に當りて幸福の計量を本來の準繩とする事無く、自然權自然法を高調し自然的財産權と人爲的財産權との對峙の上に總ての理論の根據を置いた。洵に「諸國民の繁榮を決定する法則は人間の作爲にあらず、自然の事理より抽出せるものである。吾人は之を創造するにあらず、之を發見するのみ」と云ふ J. B. Say の言說は、ホジスキンが其 "Popular Political Economy" の標語として引用する所にして、經濟學徒は須らく「人間を以て大宇宙の組織の一部と看做し、例へば草木の發育天體の運行の如くに、如何なる人事の細葉と雖必然恆久不變なる諸法則に支配せらるゝ所以を看破し」、以て富の生産分配に關する自然法則を發見適用せざる可からずと云ふのが其根本の思想であつた。而して又アダム・スミスの「國富論」に私淑する事深く曾て嘆じて曰く、「此偉人は富の自然的分配と其人爲的財産權に基く分配とを周到に區別した。然るに其衣鉢を繼げる人々は是れに反して這般の區別を顧みず、却つて彼等の著作に於ては此人爲的權利の結果が自然の法則であると述べられてゐる」と (Popular Political Economy, p. xxii)。然らば富の自然的分配とは如何と云ふに、そは勞働價値說に立脚せる勞働全收權の主張に外ならぬ。彼れは夙に其 "Travels in the North Germany" に於て「地主と資本家は一物をも生産せず。資本は勞働の所産にして、利潤は勞働者の生産物中より資本家が强奪したる其部分に過ぎざるのみ」(Vol. ii. pp. 97-8) と論難したが、斯くの如き主張は或は勞働は凡ゆる富の源泉なりと云ひ、或は總ての交換價値は勞働の所産なりと云ひ、其表現の態樣を異にすれども終始一貫彼れの諸作の隨所

に高調せらるゝ所であつて、就中小册"Labour Defended"は之を論證する事最も明細である。

十四

抑々勞働者團結禁止法撤回の是非を中心に勞資の鬪爭漸く熾烈を加へんとするや、論壇の雄殆ど擧つて資本側に味方するの概有り。或は Huskisson の如く「資本は國外に驅逐せられ、惡導せられたる勞働者等は時過ぎぬ間に之を抑壓せざれば、彼等と吾等の上に滅亡を齎らす可し」と杞憂するあり。或は Lansdowne 侯の如くに「資本は宜しく保護せざる可からず。然らずんば一層好過せらるゝ國土に流出す可し」と主張するあり。加ふるに正統派經濟學の論說を檢すれば資本の讃美到れり盡せるを見る。Mr. Culloch が「固定並に流動資本の蓄積使用は、一國文明の程度を向上せしむるに必須のものである。而して富の生産大に其分配普ねきを得るは偏に兩種資本の協力作用に依る。かるが故に資本の增加は啻に各國産業の數量を增加せしむるのみならず、亦た其結果分業の擴大新利器の發明を齎らし、爲に等量の勞働を以て無限に多量の財貨を生産せしむるに至る。加之資本は斯く分業を促進する上に更に勞働を容易ならしめ次の如き三個の態樣に於て富の生産に貢獻する。第一資本は若し是れ無くんば遂行の不可能なる仕事を遂行せしめ、又は生産の不可能なる財貨を生産せしめる。第二資本は殆ど凡ゆる種類の財貨の生産に於て勞働を節約する。第三資本は仕事の遂行を一層良好迅速ならしめる」とて資本の效用を頌へ、又 James Mill が「勞働者は原料をも器具をも所有せず。是等は資本家が彼等に給付する所にして、此給付を爲すに當り資本家が報酬を期待するは固より其所である」と不勞所得を擁護せるが如き比々皆然りである。

今ホジスキンは如上の世論に抗して勞働の爲に辯ぜんと欲するものなるが、彼れは先づ流動資本と固定資本とを嚴格に區分し夫々個別的に考究の歩を進める。以爲らく、資本主義的論客は流動資本換言すれば勞働者の衣食の資料無きに於ては、勞働者は決して卽刻收益を齎らさゞる底の事業に從事する能はざる可し。流動資本こそは勞働者の現在の生計を保證し、以て各種有益なる分業に服役するを得せしむる泉源なりと論ずれども此論不可である。固より自己が自己の勞働にいそしむ時は必ず衣食の獲得を期待し得可き保證の存せざる限り、織匠も船工も其業に安んずるを得ざるは當然なれども問題は其保證の那邊より來るかに在る。而してホジスキンの解答は此保證は人間の一般性情に由來し、流動資本と呼ばるゝ財貨の貯藏に歸せらるゝ所の效能は、實は共存勞働 Co-existing Labour 換言すれば同時に行はれつゝある他の人々の勞働に負へるものなり」と云ふに歸着する（Labour Defended, G. D. H. Cole's ed. pp. 33-38, 小泉教授前揭書、四四〇—四四三頁）。

蓋し、ホジスキンは論じて云ふ、凡ゆる財貨の眞の製作者たる勞働者は、雇主が彼れに貨幣を支拂ふ可く且つ彼れは此貨幣を以て其欲する所の物資を購買し得可きを知る。彼れが其生活の保證を得るは此事實に基くのである。彼れは何等財貨の貯藏を保有する事無し。然らば其雇主は之を保有するかと云ふに明に然らず。特殊僅少の例外を除き、資本家は毫も其勞働者が要求する財貨を豫め用意する事無し。彼れは唯だ貨幣を所有する。他の資本家に對する信用を所有する。法の裁可に從ひ勞働者の勞働を支配す可き權能を所有する。乍併衣服食料は之を所有しない。彼れは勞働者に貨幣賃銀を支拂ふ。而し

て他種の勞働者は是等の勞働者の享受せる貨幣の更に一部を受けんが爲に、衣服食料を不斷に生産しつゝあるのである。故に畢竟傭者被傭者共に專門の分業に從事するを得るは、經濟學者の云ふが如くに財貨の貯藏即ち流動資本を有する爲にあらずして、單に彼れが其特殊の業務を營みつゝある間に彼れ自身の生産せざる物資は彼れの爲に用意せられ、且彼れは自家勞働の所産を以て是に支拂ひ之を獲得し得るの確信あるが爲である。此確信たる本來何等の思慮を要せず慣習より自然に湧起するものにして、宛も太陽の明日再び昇るを期待するが如く、人事も亦た過去同樣に將來も推移す可きを漠然信ずる爲なれども、殊更穿鑿を用ふる時は吾人が他人所求の物資を用意しつゝある間に他人は吾人所求の物資を用意しつゝあるを知るの事實に歸す可く、爰に於てか凡ゆる階級の人々が其日常の業務に專念して後顧の憂無きを得るは流動資本にあらず共存勞働の賜である。共存勞働こそは社會生活の基調である。資本家が勞働者を支持使役し得るは其財貨の貯藏を所有するが爲にあらずして、他人の勞働に對する命令權を所有するが爲であると（Ibid. pp. 38-45, p. 52. 小泉教授前掲書、四四三－四四六頁）。

次に問題を固定資本に轉向する時は如何。固定資本は勞働を補助する器具機械建物の類より成る。是等の要具を使用する時は空手爲し能はざる仕事を爲さしめ、一定時間に遙に多量の仕事を爲さしめ更に一層精巧美妙に之を爲さしむる事實に關してはホジスキンと雖異論は無い。乍併彼れの紛さんと欲するは是等の器具機械は抑々何人の所産にして、且つ幾許の程度にまで勞働と分離し單獨にて生産に貢獻し得るかの問題である。思ふに最も頑强なる資本の擁護者と雖、凡ゆる器具機械が其本源に遡れば勞働の所産なる事は認容する。唯だ彼等は是に附言してそは但過去の勞働の所産にして、資本家は之を貯藏蓄積したるの故に當然利潤享得の權利を賦與せらるゝものなりと主張すれども、ホジスキンは是れと見解を異にする。即ち曰く、器具機械の製造は衣類食料の製造と同樣に絕え間がない。成る程器具機械は一年と云ふが如き短日月間に全く消費消耗せらるゝ事は稀なりと雖、然も彼等は製造せらるゝや否や能ふる限り早く使用運轉せられる。之を製造するや、何人も之を貯藏する事無く又貯藏せんと欲する事も無い。蓋し彼等が單に所謂過去の勞働の結果たるに止まる間は、換言すれば勞働者に依て夫々の用途に適用せられざる間は、彼等は之を製造せる費用を償ふ事無き故である。彼等が使用運轉せらるゝ曉に於て始めてそは利潤を齎らす。彼等は最初より全然勞働者の使用の爲に製造せられ、其勞働者の手に委せらるゝや否や資本家に對し啻に其製造費のみならず一國の利潤に相應じて超加收入を與ふるに至るのである。利潤の發生が器具機械の過去の創造に因由せざるは、之を單に放置する時は其價値の減退する事實に徵して明瞭であらう。要之一切の固定資本は、獨り一般に承認せらるゝが如くに、其發生の原始に於てのみ勞働並に熟練の創造する所と看る可きにあらずして、そは社會發達の如何なる楷梯人類史上の如何なる時代を問はず常に勞働並に熟練の産物である。固より之を作る勞働並に熟練は其種類千態萬樣なる可しと雖、依然其勞働並に熟練の産物たる點に於ては變りは無い。而して既述の如く一旦固定資本の製造せられたる後は、如何に精巧堅牢を極むと雖之を勞働者の手に依つて利用運轉するにあらざれば、唯だ朽廢

を俟つ死物に過ぎぬ（pp. 52-56）。固定資本の效能を十全に發揮せしめんには三個の條件を必要とするのみ。第一機械發明の知識才能、第二發明を具體化する技能熟練、及び第三製造せられたる要具を使用する熟練並に勞働即ち是れであると（pp. 63-64 前掲書四四六—四四八頁）。

斯くてホジスキンは時の經濟學者が資本の賜なりと爲せる一切の功績を悉く勞働の效能に歸し、其當然の歸結として利子利潤の不勞所得を廢除し勞働全收權を高調して歇まざるものである。乍併百般の貨物一として分業協業の所產たらざる無き今日、各勞働者は一生產物の果して幾許の部分が自己の勞働の所產たるを證明し得る乎。是れ勞働全收權の說くに易くして行ふに難き一因である。而してホジスキンも亦た此難關を認識し乍ら其解決には寧ろ無策であつた。

十五

ホジスキン乃ち以爲らく分業の世の中に於ては「各勞働者は僅に全體の一部分を生產するに過ぎず、且各部分は單獨にては何等の價値又は效用を有せざるが故に、勞働者が捕へて以て「此は吾が生產物である。此は吾れの所有と爲す可し」と稱し得るものは皆無である。隨つて勞働全收權實現の問題は特定生產物中の幾何の部分が各自の寄與勞働に負ふかを決定し、是れに準じて勞銀の公平なる分配を期するにある。是れが實行には必然各關係勞働者間に隔意無き折衝を必要とするであらう。而して余も亦た其解決には勞働者連自身の自由判斷に委ぬる以外に良策有るを知らぬ。若し凡ゆる種類の勞働が完全なる自由を得、且つ社會に於て最も無益なる仕事が尊敬せられ有益なる他の仕事が不當に輕蔑せらるゝが如き根據無き偏見にして絕滅せんか、此點に關する難局は消失し、各個勞働の勞銀は

スミス博士の所謂「市場の競合」に依つて公平に決定せらる可し」と（Ibid. pp. 85-86）。

約言すればホジスキンは個人主義的社會形態を保持し自由競爭制度を存續しつゝ、資本の所得を撤廢せんと欲するものである。斯くの如き理想は、彼れの問題と爲せる各關係勞働者間の協定が果して其樂觀するが如く圓滑に推移す可きや否やを論ずるまでも無く、それ自身實現の至難なる希求と云はねばならぬ。トムソンが其"Labour Rewarded"に於て此點を搏擊し、「個人主義的自由競爭は絕對平等の分配と一致し難きのみならず亦た勞働全收權の保證とも兩立せざるものである」（p. 36）、「余の知れる範圍に於て勞働全收權を希求せるに拘らず、尙個人主義的競爭を謳歌して歇まざるは獨り"Labour Defended"の著者あるのみ。他の個人主義的競爭の謳歌者は悉く、競爭制度の下に於ては斯かる希求を以て一片の空想に過ぎずと思惟するものである」（p. 97）と云へるは、何人も首肯す可き評言であらう。

爰に於てか吾人はホジスキンの思想の根柢には、殆ど無政府主義的傾向に近き自然主義哲學の潛在せる事を想起せねばならぬ。而して此特徵を最も顯著に包含せるものは其最終の著作"The Natural and Artificial Rights of Property Contrasted," 1832 である。本書は Brougham に宛てたる連續の書簡體を爲し其要旨を摘出すれば、曰く「現今社會に行はるゝ鬪爭、社會を震撼する醜惡なる激情は徹頭徹尾財產權に因由するものにして、且つ自然的財產權と人爲的財產權との重大なる區別に倚賴するにあらざれば、之を理解し得ず之を救濟する能はざるものである」（p. 1）。「自然の法律は勤勉に報ゆるに富裕を以てし怠惰に報ゆるに貧窮を以てせよと命ず

れども、國家の法律は怠惰なる者に富を與へ勤勉なる者は其の窮困に陷るまで之を搾取せざれば歇まず」(p. 154)。「此人爲の法律に依る自然的財産權の冒瀆こそ、我が社會的慘禍の最大原因である」(p. 56)。「勞働者階級の貧困窮迫の直接側近の原因は、彼等が如何に多く勞働し且つ其勞働が如何に多くの人々を富裕に生活せしむるかを顧慮する時は、租稅利潤地代等の形態に於て彼等の生産物を簒奪する所の法律に存する事は疑ひを容れざる所である」(p. 149)。畢竟現行の法律は「政府の權力を保持し地主僧侶資本家の富を保證せんが爲の規定にして、毫も勞働者の爲に其生産物を確保する事無し、蓋し立法者は決して勞働者にあらず、隨つて如何なる富に對しても之を領得す可き自然權を有せざればなり」と (p. 179)。然もホジスキンは此人爲的財産權の邪惡を匡正す可き何等の改革手段を提示せず、之を彼れに糺す時は「余は將來の福祉を培ふ可く曠野の中より社會を創造せる、夫の自然と呼び或は神と稱する偉大なる權力に信賴するものである。諸君にして余に方途方策を求めんか、余は唯だ須らくかの權力に信賴し正義を盡して疑ふ勿れと答へんのみ」と云ふのみである (p. 197, Foxwell, Introduction to Menger's "Right to Whole Produce of Labour, pp. lxiii-liv)。彼れの理論が其破壞的方面に於て甚だ透徹熱烈なるに拘らず、其建設的方面に於て殆ど無爲無策とも稱す可き極端なる自由放任に走れるは、畢竟斯くの如き過激なる自然主義思想に起因せるものと云ふ可きである。而してホジスキンを嚴正なる意義に於て社會主義者と看做す可からざる理由も亦た爰に存在する。蓋し奔放不羈なる自利の追求より社會的調和の自然に出現す可きを信奉する觀念は、往昔の空想的なると現代の學理的なるとを問はず總て社會主義思想と相去る事遙遠なるを以てゞある。彼れが「社會主義は禍害の匡正にあらず反動である。そは舊來の專制干涉の單に形態を新たにせるに過ぎず」(Lowenthal: The Ricardian Socialists, p. 68) と云へるも決して故無しとしない。

乍併翻て觀察を其階級鬪爭論に轉ぜんか、曰く「一層高き勞銀を得んが爲の勞働者の團結は、假令如何に眞相を變色せらるゝとも、畢竟資本の要求權に對する具體的搏擊に外ならぬ。之を投げたる手の何たるかは未だ明瞭に認知せられてはゐぬが、鎖の重味は既に痛感せられてゐる。抵抗徐々に增大し、資本擁護の立法激增し、勞銀增率の要求が一層過酷に抑壓せらるゝに從ひ、此壓制の原因は一層明瞭に看取せられるであらう。此鬪爭は現今雇主對職人又は或る種勞働者對他種勞働者間に行はるゝの觀あれども、其眞實の性質の早晩曝露する曉には、そは久しきに亘つて政界に無限の暴威を揮ひ以て富と名譽を壟斷し來れる怠惰なる放蕩者に對する、正直なる勤勉家の鬪爭なる事が明瞭となるであらう。而して勞働者の側に於ては其數に於て其敵を壓するが故に肉體的爭鬪力隨て强く、加ふるに過去現在に於て資本家權力の一源泉を爲せる勞働者の資本家崇拜熱は急速に衰へつゝある一方、勞働者は其共同の利害と緊密なる聯合に依りて精神的爭鬪力も亦た日々に百倍しつゝあるのである。資本家と勞働者とは國民の大多數を占む。故に此間兩者を調停す可き第三者の權力は介在し得ない。彼等は彼等自身に於て此紛爭を解決せざる可からず又解決するであらう。而して余は最後の勝利が必然正義の側に歸す可き事を期待し得るを喜ぶものである。兎もあれ勞働が完全なる勝利を博し生産的勤勞家のみ獨り富裕に

怠慢家のみ獨り貧しく、「蒔きたる者之を苅る可し」てふ金言嚴守せられ、財産權の基礎は隷屬の原理にあらずして正義の原理の上に築かれ、而して人間が其蹈める土塊用ゆる機械よりも尊敬せらるゝに至らざる限り、地上に平和あり人に善心あるの日は遂に到來する能はざる可く又到來せしめてはならないのである」と（Labour Defended, Cole's ed. pp. 103-105）。其勞働團結を提唱して徹底的鬪爭を期待し慫慂する論旨の堅實と論調の熱烈とは、正に革命的社會主義の最も峻峭なるものと其軌を一にする概がある。果して然らばホジスキンの "Labour Defended" 一篇は假令其量に於て眇たる小冊に過ぎずとは云へ、嘗に往昔の勞働運動に襟威ある理論的聲援を送れるのみならず、後日 Marx が本書を推賞して "Vorzügliche Schrift" と呼び、或は Beer が之を以て當年の "Manifesto of British Labour" なりと頌揚し、而して又 Geroge Adler が其 Hauptwerke des Sozialismus und der Sozialpolitik 中に之を收錄したるも決して偶然ではないのである。畢竟ホジスキンは其理想社會の態樣を提示する積極的建設的方面に於ては曖昧模稜の遺憾無きを得ざるも、其現存制度の邪惡を糺彈して是れが倒潰を期する消極的破壞的方面に於ては、遙に時人に卓越し永く後人の記憶に價するものと云ふ可きである。

十六

Friedrich Engels は其「空想的社會主義と科學的社會主義」に於て論じて曰く、「空想的なる思索の樣式は久しきに亘つて十九世紀の社會思想を支配し、且つ今尙其或る流派を支配してゐる。極めて最近に至るまで總ての英佛社會主義者は是れに敬意を表して來た。初期の獨逸共産主義も亦た此派に歸屬した。凡そ是等の社會主義に共通なる思想は絶對的眞理、理性、正義の表現、並に一旦之を發見する以上は唯だそれ自身のみの力を以て全世界を征服し得可しと爲す觀念である。而して絶對的眞理なるものは抑々時間空間並に人類の歷史的發展を超越せるものなるが故に、其何時何處に於て發見せらるゝやは全く偶然である。加之何を以て絶對的眞理、理性、正義と爲すかは各流派の相違に依つて其見解を異にする。更に個人各自の獨特の絶對的眞理、理性、正義は再び其主觀的解釋、境遇、及び其知慧知識の尺度に依りて左右せらるゝが故に、結局此絶對的眞理の爭論は互に他を排擠し合ふ以外に決定す可き所を知らぬ――社會主義の科學を樹立するには之を現實の基礎の上に置かねばならぬ」と（Engels: Socialism, Utopian and Scientific, trans. by E. Aveling, pp. 26-27）。Plechanoff が「空想論者とは抽象的原理に出發して完全なる社會組織を探索する者を云ふ。彼等の基點を爲せる抽象的原理とは人間の性情に關するそれであつた」（Anarchism and Socialism, trans. by E. Aveling, p. 21）と云へるも、蓋し同意義に外ならぬ。

今之を以て謂ふ所のリカアドオ派社會主義の人々の所論を通觀するに、其社會主義を遵奉する事の最も明白なるトムソン並にグレエに於ては、共に人類の完全性を認容し理性の萬能を確信する所に空想的色彩の最も濃厚なるを看る可く、比較的此色彩の稀薄なるホジスキン並にグレイに於ては其客觀的內容は寔もあれ彼等自身社會主義其物に嫌厭の情あり、更に又所謂科學的社會主義の主張者が其學說の最も肝要なる現實的基礎なりと自負せる經濟史觀に關しては、彼等の何人も然く明瞭に其精髓を把握せる者無く、凡ゆる意味に於て其理論的體系の遠く後者

に及ばざるは、公平なる觀者の誰しも承認せざる能はざる所である。

乍併假令彼等は多量の空想的傳統を具有せりとは云へ、尙其社會主義思想に經濟理論を輸致したる先驅としての功績は看過す可からざるものがある。而して彼等が資本主義經濟學中に醱酵したる勞働價値說を取つて之を倒潰するの武器に逆用せる一事は、洵に深甚なる興味を覺えしめる。或はホジスキンを除きてリカアドオに關說する所稀なる彼等を呼ぶに、リカアドオ派社會主義の名辭を以てするは聊か奇異の感無しとせざるも、然もリカアドオの「經濟原論」特に其勞働價値說が、當時に與へたる影響の如何に絕大なりしかを想記せば、此は必ずしも失當ではない。Beer は云ふリカアドオの「原論」が略ぼ一世紀以前に於て、其祖先に及ぼせる魅惑に關し適當なる想像を描く事は、今日の英人に取つては至難の事柄である。獨り獨逸人のみ今尙之を感知する事が出來る。蓋し彼れの生活は產業革命並に其產出せる社會的動亂を去る事未だ遠からず、且つ彼れはリカアドオの最後の偉大なる門徒にして勞働價値說を其窮極にまで發展せしめたる、Karl Marx を研究の對象に持つ故である。Marx の「資本論」に關する獨逸並に東部歐羅巴學界の論爭の大部分は、其精髓に於ては既に一八二〇年より一八三〇年に至るの交、英國に於てリカアドオを中心に論じ盡されたる所である」と（Beer: History of British Socialism, Vol. I. p. 188）。更に又 Marx 自身も其「資本論」第二版の序言に於て、上記の期間は「英國に於て經濟學の領域に科學的活躍の目醒ましかりし時代であつた。そはリカアドオの學說の俗化と普及の時代たると共に、亦該學說の舊派經濟學に對する抗爭の時代であつた。數多の花々しき合戰が行はれた。然も當時の出來事の歐洲大陸に殆ど知られざりし所以は、此論戰が大部分評論雜誌の論文、際物的文書、並に小冊子等に散在せるが故である」と述べてある（Marx: Capital, Vol. I. trans. by E. Untermann, p. 18）。而して爰に所謂花々しき合戰の最も餘々たる鬪士として Marx の胸奧に徂徠せる者のリカアドオ派社會主義の諸星たりしは疑を容れざる所である。

然らば此理由を以て彼等は Marx 一派の所謂科學的社會主義に優先したりと云ふを得可き乎。決して然らず。Sinakhovitch は其「マルクス主義對社會主義」の冒頭の一章に論じて曰く、「Marx 派の學說に對する流俗の誤解中、其最も根本的にして且つ最も一般的なるものは、勞働價値說を以て Marx 派社會主義の要石 Corner-stone なりとする見解である。社會的正義に對する Marx の要求が彼れの價値論と成敗を共にすると云ふ等しく誤れる見解も、亦た是れより抽出せられるのである——既に Marx 派の理論的體系に這個の解釋を下す以上は、Menger 敎授が「Marx は Thompson に劣る事甚大なるを以て宜しく後者の著書を以て社會主義の礎と看做す可し」（Right to the Whole Produce of Labour, p. xvii）との大膽なる陳述を爲せるも一應無理ではない。然し吾人に取つては、斯かる陳述は甚だ奇異である。蓋しそは倫理的勞働價値說を以て Marx 派社會主義の源泉樞軸と爲すの結果、前世紀前半に於ける感情的空想的社會主義と近代の所謂科學的社會主義との區別を拂拭する故である——Marx の價値論の功過は暫く措き、そは社會主義に對する倫理的基礎たらしめんと企圖せられしにあらずして、單に經濟現象を解釋する一手段たるものである。彼れの價値

論を以て其資本主義制度に關する經濟學的解剖の中心學說、換言すれば其經濟學說の基礎と解するは即ち可なり。されど此價値論は社會主義の單に回避す可からざる所以を辯證するを以て要旨とする所の、彼れの社會主義學說中に於ては何等の端役をも演ずるものにあらず――Marx 自身其「資本論」中 Proudhon を批判せる一節に云ふ、「Proudhon は先づ其正義の理想、其永久的正義の理想を商品生產に應當する權利關係より汲み來り、次で逆に此理想に從つて現實の商品生產及び是れに應當する權利關係を改造せんと希求する。若し一化學者ありて、新陳代謝機能の現實の諸法則を研究し此基礎に立脚して、特定の問題を解決せんとはせず、却つて代謝機能を『自然性』と『親和性』との『永久の理想』に從ひ改造せんと企圖する者あらば、吾人は彼れを如何に考ふ可きや。若し吾人にして『高利』usury は『永久の正義』『永久の公正』『永久の互助』其他『永久の諸眞理』に背反せりと言へりとせば、かの教父等がそれを『永久の恩寵』『永久の信仰』及び『永久の神意』に背反せりと云へる場合よりも、吾人は實際教父等に比し『高利』に關して知る所が多いであらう乎」（Capital, London, 1891, p. 56）と――洵に一批評家の所言の如く Marx は社會運動を以て歷史の自然的一過程と看做し、そは曾に人類の意志意識及び意向より獨立せるのみならず、寧ろ反對に人類の意志意識及び意向を決定する所の、諸法則に依つて支配せらるると思惟せるものである。斯くの如き態度は曷んぞ道德的根據、例へば勞働者は其全生產物を收受し居らずと云ふが如き道德的根據に立てる新社會組織の要請と調和する所あらんや」と（Simkhovitch: Marxism versus Socialism, pp. 2-11）。リカアドオ派社會主義と所謂科學的社會主義との輕重亦た知る可きのみ。

爰に於てか吾人は本稿に研覈せる小圖の社會思想家を以て、其前代の放縱なる空想的社會主義に顯然數歩を進むると共に、尙所謂科學的社會主義を去る事甚だ遙遠にして、畢竟前者より後者に移る轉期に於て重要なる役目を演せしものと見る可しと云ふ前言を反覆し、以て結論に代へんと欲するものである。

（完）

勢州松坂に於ける銀札の沿革（中）

三井高陽

然らばこの銀札の發行が、如何なる程度に及べるか、今文政九年戊正月より十二月迄銀札方御勘定目錄なる舊帳簿によれば次の如し。

三千九百四兩三分
銀札五萬二千四百一兩一分
以上戊正月へ越物
廣札三百二十八貫匁
其內百六十四貫匁　御爲替組
百六十四貫匁　三井組
以上戊年中刷立出來高
兩組戊年へ越物　金二千四百七十五兩三分　銀札一萬八千六百九十三兩
右の報告は兩組連名にて文政十年五月二十五日決算淸書の上、紀州藩勘定所に差出せしものなり。

而して文政十二丑年の勘定書によれば

金二千六百四兩二分
銀札五萬八千三百八十四兩三分
以上丑正月へ越物
銀札三千兩（五百三十二貫目）